

現在の社会運動に対するグラムシの教訓

マーク・エングラール&ポール・エングラール著、脇浜義明訳、大賀英二補訳

Dissent, 2023年8月29日 *脚注はすべて訳注

イタリアの理論家は、社会主義系統の組織者に重要な洞察を提供し続けている。



彼は20世紀の最も独創的思想家の一人と言われていた。しかし「学術的引用やインターネット参照が参考になるなら」とある歴史研究者は、「彼はマキャヴェリよりも影響力が大きい」と指摘していた。だから我々の社会変革過程についての考察に対して彼が与えた影響は「電撃的なもの」だと言うことが出来る。

アントニオ・グラムシは1891年にイタリアで生まれた。彼の一生は短く苦しく、貧しい家庭で子ども時代を送り、ずっと病気がちで、彼の党が革命を企画したが失敗したためにムッソリーニのファシストによって逮捕され、成人期のほとんどを牢獄の中で過ごしたことを考えると、彼の業績は並外れている。獄中では政治的書物などへのアクセスが制限されており、46歳の若さで死亡した。それにもかかわらず、彼はたくさんの重要な理論を生み出して、それらはその後、各世代や各国の活動家によって称賛され活用されている。

そういう称賛は別にして、彼の死後80年以上も経過した現在、彼の思想は活動家にとって有用であるかを検討することは、やはり必要であろう。

グラムシへの関心は単なる学術的なのか、それとも社会運動が有益な実践的教訓を彼から引き出せるのだろうか。

後者だという議論がある。社会主義を目指す活動家にとって、グラムシは後ろ向きの教条主義的マルクス主義を洗い落したマルクス主義的分析を提供しているので、非常に大切である。それと同時に、グラムシは、何故資本主義が本質的に搾取的であるのか、そしてそれを変えるためには、何故テクノクラート改革家の資本主義体制を修正するための巧妙な政策ではなく、下層部民衆の権力奪取の運動こそが必要なのかを説明する重要な洞察を示している。

社会主義者でない人々にとっても、グラムシやその系統の考え方を理解することによって、世界各地の運動がグラムシらの開発した戦略を使用し発展させたものであることを理解できる。ブラジルの土地を持たない農民は土地の占有と同時に活気ある農村学校ネットワークを創造した。スペインの左翼ポピュリストは再配分と社会的連帯を新しい「常識」として創造すべく選挙戦略を追求している。米国では、何故左翼教育者が「結合分析」(conjunctural analysis)¹のワークショップを開催しているのか、あるいは何故ジョナサン・マシュー・スマッカーが大衆運動のガイドブックに「ヘゲモニーをとる方法」(Hegemony How-To²)という題名を付けたかを理解するためには、グラムシ思想の理解が必要である。

大衆運動はグラムシの諸理論のうちどれを採用したのか。そして、それが大衆組織活動にどのような影響を与えたのか。

歴史は我々に代わって仕事をするわけではない

時の経過とともに、グラムシの政治的・戦略的理論から一群の際立った思想が発展したことは間違いない。その一つは、革命的变化は前もって定められた歴史法則から必然的に生じるものではないという認識である。進歩的運動が変革を起こすためには、民衆の大きな部分はその進歩的運動の思想を受け入れる状態を作らなければならない。そのための活動は多面的な分野 — 文化面、政治面、経済面 — で行わなければならないので、社会の様々な機関や制度との関わりを深める必要がある。

グラムシは1937年に死亡したが、イタリア以外では、とりわけ英語圏ではあまり有名ではなかった。しかし、1970年代、彼が獄中で執筆し、ファシスト官憲の目を盗んで外へ持ち出された『獄中ノート』が翻訳されてから、世界の多くの人々から注目されるようになった。1928年の裁判で検察官が「彼の脳の働きを20年間停止させなければならない」と宣言したのは有名である。豊かな内容を持つ『獄中ノート』を読めば、ムッソリーニ政権がグラムシを恐れた理由がよく分かる。

グラムシは断片的小論文で書いているけれど、幅広い分野 — 宗教、経済学、歴史、地理学、文化、教育 — の問題を深く掘り下げて論じている。歴史家のペリー・アンダーソンはグラムシの関心の広さを、「左翼の理論的文献の中では比類がない」と書いているが、現在でもその通りである。グラムシの議論は、政治的戦略に関してばかりでなく、文化研究、民衆史、資本主義下の「世界システム」の研究にも大きな影響を与えた。

イタリア共産党指導者だったグラムシは、1919～1920年に続発したトリノのフィアット自動車工場占拠に着目した。ロシアの歴史的なボルシェビキ革命のあとだけに、工場占拠は労働者による革命闘争の徴候のように思えた。しかし、その後ファシズムの台頭、さらに1926年にファシストによって投獄されたこともあって、彼は社会変革の道に関する考え方を修正せざるを得なくなった。ジャマイカ生まれの英国人学者スチュアート・ホールが書いたように、「グラムシは概してマルクス主義パラダイムで考察をしたけれど、マルクス主義の理論的枠組みの多くを修正、刷新、洗練し、時代の現実に合うようにした。」彼が放棄した概念の一つは、伝統的な歴史的必然という概念であった。

グラムシの生きていた時代には、「科学的社会主義者」が決定論的歴史観を説くのが普通であった。この歴史観によれば、カール・マルクスが明らかにしたのは経済発展にも自然の法則に似た法則があるということで、資本主義は自らの体内に内包する矛盾によって必然的に危機に直面し、その危機の中でプ

¹ スチュアート・ホールの文化犯罪学に関する本の題名。

² https://archive.org/details/isbn_9781849352550/page/n1/mode/1up?view=theater
https://books.google.co.jp/books/about/Hegemony_How_To.html?id=ANTIDQAAQBAJ&redir_esc=y

ロレタリアートが搾取者ブジョアジーを打倒する、というもの。

グラムシは、過去及び現在のマルクス主義者が吹聴する決定論的歴史観は、結局運動家を運命論的態度、受け身で口先だけの過激派的態度に導くものだとして批判した。止めることが出来ない必然的な歴史の進行によって政治的問題が解決できると見る人々は、頭の中で描く目標を実際の行動と結び付けるような綿密な計画を立てる左翼としての責任を負うことをしない。それどころか、グラムシに言わせれば、ただ頑迷に一切の妥協や舵取りの変更を反対し、「物事が悪化する方がよいのだ」という無責任な傍観者の態度を発展させる。彼は、「歴史的必然性によって必ず革命に絶好な状態となり、それが、何か分からない形で革命を前進させると考え、彼らは変革を積極的に追求する実践運動を無用であるばかりか有害であると決めつけるのだ」と批判した。

そのような決定論的歴史観はマルクスを還元主義的に誤った読み方をしていると批判できるが、実際これまでの時代で多くの社会変革運動家の心を捉えていたのは事実で、とりわけ1889～1916年の労働社会主義者が国境を越えて手を結んだ第二インターナショナル時代の特徴であった。その時代はグラムシの青年時代であった。

グラムシは経済力と階級関係が歴史の流れを形成するカギという考え方に忠実であった。しかし、社会の根本構造を良い方向に変革するのは、断固とした人間の意志に基づく組織運動と思慮深い戦略であると考えた。「差し迫った経済危機それ自体が大きな歴史的事件を引き起こす」という考え方に反対した。「そのような考え方から生まれるのは資本にとって都合の良い思考様式や組織だけだ」と彼は書いている。確かに資本主義には周期的に危機が訪れ、社会主義的変革への機会を提供するが、その機会を使うためには人々が結集して「自らの意志と力量」を行使しなければならない、と彼は論じている。

経済主義 — 歴史の流れの背後にある物質的原因を過度に強調する考え方 — や教条主義 — 善意と決意表明だけで革命が達成できると思う馬鹿げた姿勢 — の犠牲にならないことがグラムシを理解しその理論を実践するカギである。思想と客観的条件のバランスをとるためには、注意深い観察と歴史的分析が必要である。

運動は目下の「力関係」、敵・味方の様々な集団間の社会的、政治的、軍事的な力関係をしっかりと研究しなければならない。社会で起きている変化を見て、その変化が経済構造の変化を反映する「内在的」な変化であるのか、それとも単なる付随的な変化 — 「多分に偶然的で」「遠大な歴史的意味を持たない」変化であるのかを、見極めなければならない。そのような周到で注意深い準備を通して「社会変革の必要十分条件が整っているかどうか」「所与の行動計画が実行可能かどうか」を決定しなければならない。

この考え方はラジカル思想家や活動家の共感を呼んだ。デトロイトの作家でオルガナイザーで活動家のグレイス・リー・ボッグズもその一人で、彼は行動計画を練る社会運動戦略家に「歴史時計では何時か」と考慮せよと助言した。さらに、グラムシ理論は市民のレジスタンスの伝統とも似ている。レジスタンスは自分たちの力量と客観的状況で判断して行動した。つまり、グラムシは闘争の成否はその時の歴史的状況と主体的意志の両者にかかっているとしたのである。

グラムシ理論が暗示している重要なことは、社会主義に至る道はすべての国にとって同一ではないということだ。政治風景は国によって異なるので、現地をきちんと見ること — グラムシの言葉で言えば、「それぞれ個別国家を正確に測量する」ことが必要となる。

この考え方は、とりわけグローバル・サウスの活動家の心を動かした。彼らは自分たちの地域の独自の歴史に沿って社会変革理論を開拓した。ニコラス・アレンやエルナン・ウビーニャは、「ラテンアメリカの社会主義者は、グラムシの作品を、正統派マルクス主義が無視した地域の社会的現実を、マルク

ス主義的理論で研究した知的遺産の中に組み入れている」と書いた。『獄中ノート』はグローバル・サウスの活動家に「地域の共産党がコミンテルンに遠慮して無視してきた地域の特殊性に真正面から取り組む」ことを、奨励した。コミンテルンは個別国家の特殊性を軽視する歴史観であった。

グラムシが研究と実践の結合を大切としたことは、言うまでもない。過去の歴史の一断片を書く場合は別として、政治研究は「それ自身を目的とする」ことはできないし、してはならない。政治研究は「具体的実践活動や人々の主体的意志の働きに奉仕する限りにおいて、有意味」となる。政治研究は、最小抵抗運動にも重要点を示唆するものでなければならない — どうすれば人民の意志と力を効果的に結集できるか、どのような形態の緊急戦術行動をとるべきかを暗示するものでなければならない。

グラムシ理論が単に正統派マルクス主義の批判のツールであるだけならば、現在まで彼の理論が生き続けるはずがない。彼の理論はそれ以上に大きな意味がある。現在にはグラムシ時代に圧倒的だった労働者階級の歴史的運命への信仰はもう一般的ではないけれども、決定論的歴史観を持っている人々 — 主流派学者、政治評論家、リベラル、急進派に関わらず — はかなり多い。これらの人々は、社会運動には歴史に影響を与える力はない、大きな大衆蜂起は我々の力を超えた歴史的事情からしか起きない、技術革新こそが進歩と変革をもたらす唯一の動員力だ、などの考え方を抱いている。

このような主体の意志を無視する考え方、それらが絶望、シニシズム、技術進歩への病的な信仰、権力奪取を恐れる臆病な心情などから生まれるのかどうかはともかく、グラムシ理論はそういうアパシーを排除する貴重なツールとなる。グラムシ理論は運動に機会がきたら行動するように人々を教育し組織する責任を担えと激励する。要するに、グラムシは、歴史的条件が革命に適しているかどうかを判断するのはその条件に効果的介入する具体的可能性を持つ人々だけである、と言っているのだ。換言すると、運命が味方するのは主体的な組織活動に対してである。

観念の闘いに勝つこと

グラムシは、伝統的マルクス主義では社会の「上部構造」とされた文化的、政治的、イデオロギー的要素の重要性を詳述して、突破口を開いた。その中で、運動が正しい社会像を持続的な形で社会に定着させるための新理論を開発した。

革命がロシアで成功し、グラムシのいるイタリアを含む他の国ではうまくいかなかった理由を考察する中で、彼は支配層の制御力の強さという洞察を活用した。彼の考察では、資本主義国家を単に強制 — 裁判所、警察、軍隊 — によって維持される政府機構の塊りに限定してはならず、それどころか、国家の力はもっと広いところ、つまり学校、メディア、教会、その他市民社会の諸機構に染み込んで、それらを基盤に形成されていると見た。ヘゲモニーの維持によってだけ支配体制が存続するのだ。グラムシはこのヘゲモニーという概念を重要視した。ヘゲモニーには力の行使や法的強制力が伴うだけでなく、支配層のイデオロギーを社会全体に普及させ、支配層の支配を正当化し、人々をそれに同意させるのだ。

こういう考えを基礎にして、グラムシはロシアと西側諸国の条件の差を次のように指摘した。ロシアでは、形の上では国家諸機構が国民を支配しているが、市民社会は未発達で、まるでゼリー状のように未分化であった。ところが「西側では、国家と市民社会の間には一つの適切な関係があった」。市民社会の存在が支配層の容易な転覆を防いだのである。「国家が揺らぐと、頑丈な市民社会構造がすぐに姿を現す」と彼は説明する。国家とは単に外堀にすぎず、その背後には要塞や土塁の強固なシステムがあるのだ。その要塞や土塁の数は国によって多かったり少なかったりするが。

こういう条件を認めたとえで、グラムシは、ロシアであったような直接的攻撃による権力奪取である「機動戦」は、先進資本主義諸国では不可能なので、それとは異なる闘争形態を採らざるを得ない、と

グラムシは論じた。西側では、組織闘争は「陣地戦」を重点的に行わなければならない — つまり、ヘゲモニー獲得のための長期戦を、社会生活のあらゆる次元で行わなければならない。

これが意味するのは観念の闘争に勝てということである。批評家のレイモンド・ウィリアムズは、ヘゲモニーは「一般のイデオロギー以上に深く人々の意識の中に沁み込んだ行動、意味、価値観の中心的体系」から構成され、絶えず「更新、再生、擁護」されなければならないもの、と書いている。グラムシ主義の思想家や活動家は、変革を志向する人々は人民がこの世界における自分たちの位置を正しく理解する「新しい常識」を、全力をあげて構築すべきだと主張している。

ニューヨーク市の活動家で草の根政策プロジェクトの教育者であるハーモニー・ゴールドバーグは、「狭く労働者階級を基盤と限定する運動では社会主義は実現できないし、維持もできない、とグラムシは書いている。もっと広い多次的同盟（グラムシは歴史的ブロックと呼んでいる）が必要で、労働者階級はその中の主導力である。広い多次的同盟は変革への統一ビジョンの基で結束し、成員全体の利益のために闘う、とグラムシは主張している」と説明した。統一的同盟の構築が意味しているのは、人民は社会における自分の経済的位置だけに基づいて機械的に思想を形成するのではないという認識である。

スチュアート・ホールは、経済的位置だけでなく、「人種、民族、国籍、ジェンダーにまつわる差別や矛盾」が人々の思想形成に大きく影響すると述べている。また彼は他の論文で、社会グループの関心は「与えられるものではなく、政治的・イデオロギー的に構築されるべきもの」と書いている。

この発想は重要なことを意味している。大衆向けメッセージの発信とそれに基づく連合団体作りは、主流派リベラルの領域だけであってはならず、より変革的な変化を求める勢力の領域でも行うべきだということ。社会運動が勝利したいならば、孤立した同じ考えの活動家に訴えるスローガンの配布で満足してはいけない。既存の基盤を越えてもっと広く手を伸ばし、将来仲間になる可能性を秘めた人々やグループに訴えるメッセージを作成して、彼らに働きかけなければならない。

新しい常識を構築するためには、人々を自己満足状態に閉じ込める既成思想と闘わなければならない。ゴールドバーグは、支配層が人々を染めている個人主義的で対立的な心の構えは人々をバラバラにしていると述べている。「私たちの利益は資本主義の成功と一致する」、「資本主義に代わる社会体制なんかない」、「私たちは卓越性と劣等性という基準で人間を分類する感覚を内部化する」などの、間違っただけの考え方や感じ方を彼女は指摘している。

このような間違っただけの考え方や感じ方を克服して、我々自身のヘゲモニーを形成するためには、もう一つの世界の可能性を説得力ある形で明確にしなければならない。しかし、それは最初の一步にすぎない。もう一つの世界の思想に共感し支持する社会グループを選択し、その人たちと同盟し、変革のための政治勢力を構築しなければならない。現代のグラムシ主義者が言うように、十分に大きな「我々」を作り上げることが目標だ。選挙があるときにはそれに勝利する努力をするが、それだけではなく、一般の人々が自己認識と他者との関係に関して自己変革するような運動をしなければならない。変革行動へ向かって集団的意志を構築しなければならない。

社会の諸機関との関わりの深化

グラムシ思想は戦略的多様性を奨励する。国別の独特な状況の分析に基づいて変革活動の形態が生まれるのだから、地理的位置が異なれば運動の戦略も異なるのは当然である。陣地戦は長期戦で、しかも多様な戦線で闘うので、多方面からの幅広い貢献や支援が社会的・経済的正義実現の闘いの助けになる。

ダニエル・デンバーは自分のポッドキャストである **Dig** でグラムシ研究者のマイケル・デニングをイ

インタビューした。その中でデンバーは、グラムシの思想は、選挙主義、相互扶助運動、職場闘争の間の左翼内の無益な論争から抜け出し、それら各戦略は排除し合うものでなくて補完し合うものであることを論じていることを指摘した。「私たちは皆、必ずしも才能があるわけでもないのに、人に何かをするように強要するのではなくて、自分の才能や能力に従って、お互いをもっと思いやることができるはずだ」とデニングはインタビューの中で語った。さらに彼は続けて「グラムシは活動家に、自分のやっていることが中心だと思わないように論じている。人々は自分が得意とする分野で闘えばよいのだと書いている」と言った。

陣地戦をどう闘うかは議論的である。1960年代後半、ドイツの学生活動家ルディ・ドゥツッケは、左翼は「様々な社会機構の中で大行進する必要がある」と言った。つまり、既存の社会的機構 — 学校や大学、政党、報道機関、医療施設、地域社会組織、労働組合、学術団体などへ積極的に入り込んで、それらを改革せよ、と言ったのである。そういう「大行進」はグラムシ思想の拡張であると見る人は多い。

ブラジルの土地なき農民運動（MST）はこのやり方を実践した。ラテンアメリカの社会運動の中でもMSTは最大の運動で、35万以上の世帯を擁する土地を占拠し、政府と批判的に接触・交流して、学校、地域診療所、食物加工センターなどを作った。

教育と労使関係学の研究者レベッカ・ターラウはMSTのやり方を「係争的共同ガバナンス」（contentious co-governance）と呼んでいる。農民活動家たちは既存の社会的機関の性質を変えたばかりでなく、それらの機関を使って自分たちの運動の正当性と力を拡大したのである。「大切な点は、MSTはグラムシの戦略を実現したばかりか、グラムシ理論を活用して自分たちのブラジル政府との継続的関わりを正当化したことである」と彼女は書いている。

このやり方の重要な点は、運動参加者が既存機関に入っていくとき、単なる改良者 — そういう立場だと既存機関の価値観に同化・吸収され易い — としてではなく、ヘゲモニー獲得のための進歩的事業を行ううえで必要な「知的・倫理的指導部」を構築する闘いの一環として入っていくことだ。グラムシが造語した「有機的知識人」（organic intellectuals）は当時イタリアの村の教師や教区牧師に相当するもので、より良い社会作りをする対抗的思想を実践に移すうえで重要な役割を担う。伝統的教師や牧師と異なり、運動参加者たちは学問上の発展理論を説くのではなく、地域の具体的問題や学校や診療所などの機関の中で実際の指導力を発揮し、対抗的イデオロギーを広めるのだ。農民や労働者の中から生まれる「有機的」知識人なのだ。ターラウは、これらMST農民は自分たちの政治的・経済的目標に関して市民社会の同意を得るべく絶え間なく努力し、「新しい社会関係構築」に努力している、と述べている。

よくあることだが、主流派政治研究者は、権力が政府一点に集中的に存在するから、特に連邦レベルでは勝つ見込みのある中道派に政権を握らせるのが進歩への道筋だと論述する。グラムシは、権力はあちらこちらに存在し、政権獲得は本当に正しい進歩的ビジョンに大衆の知性と感性を結集させる大きな戦略の一環にすぎないと述べる。選挙による政権獲得以外の場所では、それぞれの分野で権力を獲得しようと闘っている人々がたくさんいる — 職場で、学校で、教会で、食品協同組合で、地域運動で。それらの個別闘争は包括的な変革構想と結び付いていない場合が多い。グラムシは、あらゆる分野で個別闘争を進展させることを激励しているが、同時にそれらの個別闘争を社会変革という共通課題の一部として包摂し結合することを奨励している。

スチャート・ホールは1980年代に「とりわけ現在は、旧政治的アイデンティティが崩れていく時代だ」と書いた。現代に関しても同じことが言える。社会正義を求める運動を成功させるためには、新しいアイデンティティと新しい同盟関係を、様々な機関や団体との関係・交流や人々の生活を形成して

いる政治的対立の場への積極的介入を通じて、構築する努力をしなければならない。

現在我々が直面している課題に対してグラムシが**安易な**答えを提供しているわけではない。しかし、「ヘゲモニー」、「陣地戦」、「有機的知識人」、多次元的同盟である「歴史的ブロック」、新「常識」樹立闘争などのグラムシの概念は社会運動に内容豊かな語彙を提供してくれる。彼は、決定論的歴史観を否定すると同時に、社会に深く根付いている信念と関わることを主張して、危機にしっかり関係するダイナミックなラジカルな政治学、変革の政治学へのアプローチ — まだ実現していないが — を、提案している。